

教会音楽ニュースレター No.21

聖書宣教会 聖書神学舎聖書科・教会音楽専攻

2020.9.1.発行

【教会音楽専攻教師・講師より ～今それぞれが伝えたいこと、思わされていること】

『コロナ禍においてもできること』

矢吹綾子

毎年受難日には、バッハのヨハネ受難曲の聖書朗読と賛美による演奏会で、オルガン伴奏をさせていただいていました。

今年は、新型コロナのため演奏会は中止となり、受難日を自宅で過ごすことになりました。そのような時、ドイツのライプツィヒのトーマス教会で室内楽バージョンのヨハネ受難曲のコンサートがオンラインで行われるという情報を友人が届けてくれました。

イースターの前の週に、毎年世界各地でバッハのヨハネ受難曲、およびマタイ受難曲が演奏されるのが恒例となっていますが、今年はコロナ禍で中止となりました。ライプツィヒでも、毎年いずれかの受難曲をトーマス教会で演奏しているようですが、今年はバッハフェスティバル事務局が企画し、世界に向けライブ放映をすることにしたそうです。

コンサートでは、バッハのお墓がある祭壇の前に立つテノールのソリストが、マリンバ、ヒブラフォン、オルガン、チェンバロの伴奏で、ほとんどの部分をひとりで歌ったり、語ったりしていました。コーラルの合唱は、現場のアンサンブルの他、世界の音楽家やトーマス教会少年合唱団、世界中のバッハ合唱団がネットで参加していました。こんな方法でのヨハネ受難曲を聴くことができ、今年も受難日にイエスさまの十字架を思い、静まるひとときを持つことができたと感謝しました。

今年度、聖書宣教会教会音楽夏期講習会の中止に伴い、教会音楽専攻の先生方と話し合いを重ね、過去3年間の参加者限定ではありましたが、オンライン講習会を行うことになりました。新型コロナの影響で日々の生活にストレスが溜まる中、何もしないほうが楽だと、うしろ向きの思いがよぎりましたが、主の働きを止めてはいけなさと示され、重い腰を上げて講義の準備を進めていく中で、多くの気付きが与えられ、私自身が教えられ、恵まれました。また、オンライン講習会に多くの視聴希望者が与えられたことにも励まされました。

コロナ禍の中、いままでとは違う生活、神学校や諸教会での働きが続きますが、主を見上げつつ、できることを模索し、主の働きを続けていきたいと願っています。

『まず聖書を』

石川由紀子

そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」 ルカの福音書24章44節

上記の聖句を初めて読んだ時、旧約聖書の詩篇にイエス様のことが書いてあるのかと、とても驚きました。いくつか思い浮かべる箇所はありましたが、ほんの少しであろうと思いました。

教会の礼拝で会衆とともに詩篇を歌い始めて十数年。詩篇こそ、信仰者が歌うために神様が用意してくださった、特別に素晴らしい歌であると分かりました。ダビデやモーセが書いた詩でありながら、それら全体が究極的に神の御子、イエス・キリストを指し示しているのだと思うようになりました。礼拝で歌う場合は特にそうです。礼拝される唯一の方は神であり、正しい方も神お一人です。完全にみことばに従われた正しい方であるのに（であるからこそ）苦しみの極みを経験された御子、キリスト。この方を思わずにはいられません。キリストの憎む敵についても、固有名詞は出さないものの創世記から黙示録まで一貫しています。詩篇を歌い続けるなら、創造主でありまことの王、再び来られるキリストの全体像、聖書全体の契約を常に思い巡らすこととなります。礼拝で語られるみことばと相まって、私たちが贖ってくださった主への感謝に満ち溢れるのです。すばらしい主がともにいてくださる事実力がわいてきます。これは新しい取り組みではありません。聖書の時代にあったことで、人としてのイエスさまも使徒たちも歌っていたはずです。新約聖書に詩篇の引用が多いのも納得のいくことです。

聖書に根ざした良質な讃美歌が確かにあります。それはまるで良い信仰書のようです。でも聖書と同列に置くことはできません。まず主の備えてくださった聖書の歌をもって、主のみわざをたたえようではありませんか。

オンライン礼拝を余儀なくされる中で、最も困難を覚えたのは賛美歌を歌うことでした。歌い出した途端、音声が極端に遅くなってしまうのです。歌のことは足踏みし、思考が途絶えました。思わず音を消して画面のこちら側だけで歌わざるを得なかったとき、音楽が果たしている役割のひとつを思わされたことでした。淀みなく流れる律動を持った歌いやすい旋律を共有してこそ、そこに乗せられた大切な賛美のことは「共に」歌うことが出来、「互いに語り」合うことが出来るのだとつくづく思ったものです。この時節、代表者だけが歌う教会もあると聞きます。共に声を出して歌うのでなくても、歌われることばに耳を傾け心をあわせることが（ストレスなく）出来るなら、それも「互いに語」ることになる、とも思います。賛美歌の「ことば」の中心性や音楽の役割について、改めて思いを巡らしたことでした。

オンライン講習会を開催することになったとき、気後れしていた私にI師が勧めてくださいったのが、コラールの訳詞でした。情けないことにはじめは渋々でしたが、腰を据えて取り組むうちに、みことばに根差した先人の信仰の確かさや、主の前に身を低くする姿勢に触れ、深い感動を覚えました。

少し前、まだ学期中のJBS祈禱会で読んでいたネヘミヤ書8章で、みおしえの書が読まれそれを「理解した」民が改心し、それに伴い感動と喜びが湧き上がったという記事に触れたとき、賛美の原動力は主のみことばであり、コラールを生み出したあの宗教改革もまた、その出発点はみことばの再発見であったことを思いました。

講習会で扱ったコラールは宗教改革時より少し後のもので、共同性の点ではやや弱いものでしたが、御業を深く受け止めたゆえの感動のことば、みことばを理解し「心に住まわせ」たところからくる、日本語には訳しきれない豊かな祈りや告白のことばに心をあわせる時が与えられたことは、今夏の大きな恵みでした。

詩篇 145篇 ダビデの賛歌。

私の神 王よ 私はあなたをあがめます。
あなたの御名を 世々限りなくほめたたえます。(1節)

人々はあなたの豊かないつくしみの思い
出をあふれるばかりに語り あなたの義
を高らかに歌います。(7節)

主にある兄妹姉妹と共に集まり主を礼拝し賛美することが困難な時にあります。賛美の貧しさを改めて示されています。主を知るこの貧しさ、みことばを理解する貧しさは賛美を貧しくします。

主の教会はかつて多くの困難な時代を経験してきました。人々は困難の中、闘いの中、苦しみの中で主に信頼し、主の名を呼び祈り歌いました。今、新しい賛美の歌が主の前に歌われることを願っています。主が新しい歌を、歌う旗手を与えてくださることを期待しています。

主の聖なる御名が崇められ、讃えられ、主のあわれみと恵み、主の救いがあふれるほどに語り告げられますよう祈ります。

聖書科・教会音楽専攻のご案内

伝道者としての召命が明確であり、卒業後は伝道者として、また教会音楽奉仕者として主の教会に仕えることを目指す方のためのコース・専攻です。聖書神学舎聖書科・聖書専攻における聖書の学びに加えて、聖書に基づく教会音楽の理論と実技とを学びます。研修生活や寮生活を通しての訓練、奉仕教会等での実践的な訓練は聖書神学舎本科と同じです。

今後の予定

11月7日 オープンデイ

11月28日 賛美礼拝 テーマ『主の御手による取り扱い』詩篇32篇3-4節
説教者：田村 将師

コロナ対応で皆様を学舎にお迎えすることが出来ませんが、オンライン配信を検討中です。詳細は後日聖書宣教会ウェブサイトでご案内いたします。
<http://www.bibleseminary.jp>をご覧ください。